

1 基本情報

- (1) 研究主題：主体的に学ぶ子どもの育成
～言葉による見方・考え方を働かせる授業を通して～
- (2) 教科：国語科
- (3) 期 日：令和3年12月8日（水）
- (4) 会 場：新潟市立新潟小学校 ※オンライン公開
- (5) 研究組織：新潟市小学校教育研究協議会 国語部

2 研究の概要

本研究は6年次を迎える。1年次より、学習指導要領改訂を想定し、かつ「新潟市の授業づくり」に基づいた授業実践を継続してきた。そして、「主体的に学ぶ子どもの育成」を研究主題に掲げてきた。これまでの授業から国語科における「主体的に学ぶ子ども」としては、以下のような姿が確認できた。

- ・ 課題に興味・関心をもち、その課題を言葉にこだわりながら解決しようとする姿。
- ・ 目的意識(見通し)をもって言語活動に取り組み、身に付けた言葉の力(資質・能力)を共有したり、振り返ったりして自覚する姿

国語科において、「主体的に学ぶ子ども」とは、上記のことをまとめると「言葉に対してこだわりをもちその意味や働きなどを進んで追究しようとする姿」と定義する。

これまでの5年間の研究から、子どもが主体的に学ぶためには、以下のことが重要であることが分かってきた。

- ① 児童の学習意欲を喚起する学習課題(単元・一単位時間)を提示する。
- ② 学習活動への見通し(プロセスの見通し・ゴールイメージの見通し)をもたせる。
- ③ 振り返りと共有の場を設ける。
- ④ 「言葉による見方・考え方」を働かせる話合いの場を設定する。

令和元年度からは④を研究の中心に据えてきた。これまでの実践から、「言葉による見方・考え方を働かせる姿」を以下のように定義する。

言葉に着目し、言葉にこだわりながら思考する姿

この姿は、研究主題の「主体的に学ぶ子ども」＝「言葉に対してこだわりをもち、その意味や働きなどを進んで追究しようとする姿」にも通じる。課題を追求する過程で、言葉の意味・働き・使い方に着目し、言葉を吟味(検討)しながら、考える姿を言う。

物語教材文か説明教材文を中心とした「読むこと」の実践を行ってきた。今年度も、物語教材文と説明教材文を中心として実践を行っている。子どもたちが主体的に学ぶために、どのように言葉による見方・考え方を引き出し、それを働かせて、どのように思考させていくかを研究していく。

【基本的な授業構想イメージ図】



3 授業の概要

(1) 1年国語科授業について

- ① 授業者： 教諭 内山 さとみ
- ② 単元名：「おもいうかべながら よもう」
- ③ 概要：



本時は授業の導入で、『くじらぐも』の3の場面を教師が範読した。「同じ言葉は同じように読んでけど、それでよい？」と聞くと、「それでよい」という意見と、「少しずつ大きくした方がいい」という意見が出たので子どもの実態に合わせて、「だんだん声を大きくしたほうがいいのかな。」と課題設定した。

「ページの中にきつと理由があるはず」と教師が投げ掛けると、「読みたい」「相談したい」と声が出たので、すぐにペアで相談しながら、読み方の根拠となる部分に線を引いた。

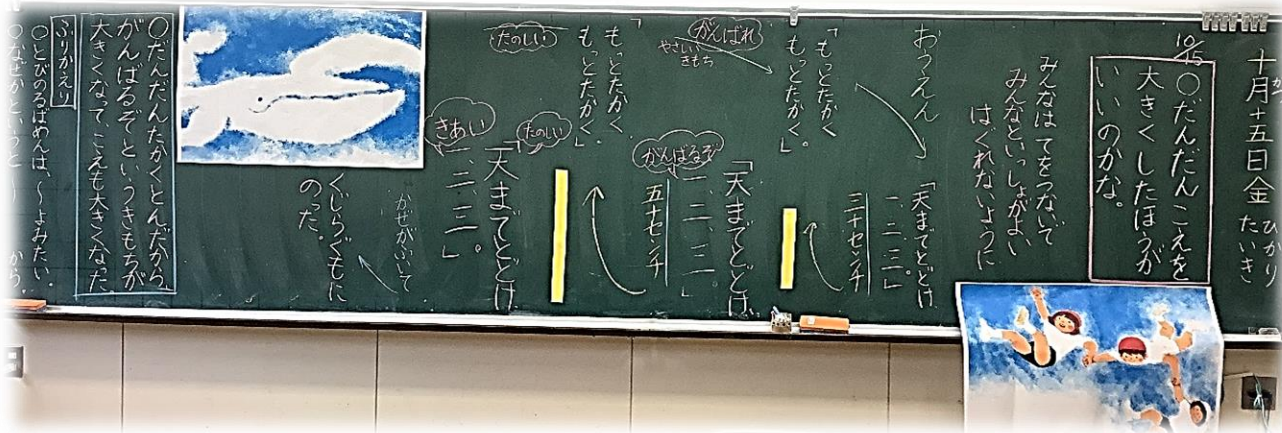
「30センチ、50センチと書いてあって、30センチはちょっとだけ小さいから小さく読む。50センチはちょっとだけ大きいから、大きく読む。」「応援しましたって書いてあるから、もっとがんばるぞという気持ちになったと思う。」などの意見が出され、教師は、繰り返される言葉をだんだんと大きく板書した。また、実際の長さを紙テープで提示し見せると、児童は「とべる！」と想像を広げていた。上段にくじらぐも、下段に子どもたちの言動と気持ちを分けて板書していった。

1つの班が代表で前に出て子ども役に、残り子どもたちはくじらぐもの役になって音読をした。書かれている通りに手をつないで丸くなり、音読をした後、教師が「どうして手をつないだの？」と聞くと、子どもたちは、「はぐれないように」「一緒の場所に行けるから」など、想像を広げ様々な意見を出した。2回目の動作化では、本当に声が大きくなるかを確かめるために、別の班を前に出し、今度はどんな気持ちだったかを問うた。くじらぐも役の子からは、「がんばれ」という気持ち、子ども役の子からは、「楽しかった。乗る気になるもん。」と、お話の世界に入り、想像を広げて話し合う様子が見られた。

- T「じゃあ、声は大きくした方がよさそう？」 C「うん」 T「どうして？」
- C「だんだん高くとんで、がんばるぞ！という気持ちになるから。」
- T「何が高くなったの？」 C「ジャンプが高くなった。」

そのような子どもたちとのやりとりから、「だんだんたかくとんだから、がんばるぞというきもちが大きくなって、こえも大きくなった。」とまとめた。

【本時最終板書】



4 研究の成果

指導者の新潟市立浜浦小学校長 齋藤 純一様からは、主に次の3点についてご指導をいただいた。

- ① 「だんだんこえを大きくしたほうがいい」という理由を見付けるために、子どもたちは場面の様子が分かる文に次々と線を引いていた。会話文の読み方の根拠を明らかにするために、読み方の根拠となる部分に線を引く活動が、場面の様子に着目するための有効な手段だった。
- ② 物語の子どもたちと同じように動作化をしたり、実際の長さを紙テープで提示したりしたことで、実感を伴って想像しながら読むという「見方・考え方」を働かせて、話合いをする姿が見られた。「30cmだったらとべそうだ」「本当にくじらぐもに乗りたい」「くじらぐもと同じ気持ちになって応援したい」という気持ちを高めていた。
- ③ 子どもたちから出た意見をつなげながら、構造的に板書したことで、視覚的に訴え、登場人物の対比について整理することができていた。



課題を設定する前に、児童に考えさせる時間を取り、全員に課題が届くようにすることの重要性を改めて認識することができた。

低学年にとって読解の重要な手立てとなる動作化や音読などの活動をコロナ禍ということもあり制約の中で行うことになった。このような状況の中でも学習のねらいを達成できるような方策を今後も継続して考えていく。